――現場からの報告――

帰国生徒に対する国語教育

佐野正俊

日本の現行教育制度・内容とは異なる教育的背景を持つ海外よりの帰国生徒に対する教育には様々な困難が存在している。私の勤務校はそのような生徒を受け入れることを主目的としている。帰国生徒が全校の2/3を占め、日英両言語によるバイリンガル制度を導入している本校にとって、特に日本語・国語の授業は重要な意味を持っている。

海外生活が十年を超えるような生徒の日本語力が小学校三年生程度であるかと思えば、一般中学出身者はかなり高度な授業内容を要求してくる。当然のことながら、ホームルーム単位での授業は成立しない。生徒は日本語（三段階）と外国語（英語四段階、仏語、独語、西語各二段階）の言語力によってセット分けされる。日英二ヶ国語を駆使する日本語教育専門の専任教員を二名持ちながらも、我が国語科の教員にも特殊な授業方法が必要とされる。

一般生徒と比較して、日本語力に潜在的な不安を持つ帰国生徒は、テキストとなった文章の一字一句の意味内容に対して、吟味、反芻を繰り返しながら読んでいこうとする。日常の言語生活において常に精神的圧迫を感じている彼らにしてみれば、至極当然な行為ではある。しかし、基礎的な接続詞一語にもこだわる一見、「たどたどしい」とも思える彼らの読解作業に接しているうちに、私は逆に自分自身の言語に対する態度の甘さを再認識させられた。我々は偏った先入観や独断的な理解によって、テキストの真意を歪曲、脱落させたまま授業に臨んではいないだろうか。毎日の生活や教材研究、表現指導の過程等において、言語に対する真摯な姿勢を常持し続けているだろうか。

その他、授業方法論上の問題もいくつか感じている。帰国生徒の感覚に深く根づいている、欧米的合理主義と日本の精神主義との齟齬は、しばしばテキスト読解の妨げとなる。漱石の『こころ』における「先生」の自殺の理由を日本的な罪の意識や義理等の概念を導入して説明する作業には多くの困難が伴う。古典文学の世界においては言わずもがなである。また、高度な中国語力を持つ生徒に対する漢文という教科の持つ存在意義。一般的な高校生であれば当然既知である日本の文化財や風土等の紹介までも請け負う国語科の授業の慢性的な時間数不足にも頭を痛めている。

現在、社会的に日本語教育に対する関心は高い。文化の国際化が声高に叫ばれる今、初等中等教育課程における帰国生徒教育の試みは開始されたばかりである。帰国生徒教育についての包括的、実践的な報告例も極めて少ない。私にとっての試行錯誤の日々はまだまだ続きそうである。

（国際基督教大学高等学校教諭）

――現場からの報告――

方法以前

小野村　浩

男子校・女子校という異なった環境の中で教鞭をとり、試行錯誤を繰り返しているうちに二年が過ぎた。私自身がこの期間に教壇の上で学んだことは、私が生徒たちに呈示できたことより、間違いなく大きかった、と思う。いくつかの失敗を重ねるうちに、「授業の流れをつくる」という感覚を掴んだと思える瞬間もあった。しかし、板書の方法や設問のちりばめ方を身につけていく一方で、自分が目指すべき興味深い授業とはどんなものなのだろうかという根本的な問いが、最近になって再び頭の片隅を占めるようになった。

例えば、授業の方法において最も苦しんだ教材に、夏目漱石の『こころ』と森鷗外の『舞姫』があった。明治という時代の意識を無視して読むことが困難なこれらの作品において、授業の中で時代をどこまで意識して読む必要があるかという点が課題であった。生徒がそれぞれの読み方で作品に対峙している横から、明治という言葉を投げ入れることがなぜか躊躇われてならなかった。授業の中でこれらの作品を扱うとき、誘導訊問のように時代という観念を口にする必要があるのだろうかという疑問が、最後まで拭えなかったのである。それは同時に、私自身が読解しえた、明治という時代の持つ意味の重さの深浅度に帰着する問題かもしれない。

また例えば、『徒然草』や『論語』などの古典作品を学習していて、こうした文章の内容がどれほど深く生徒の内奥に届くのかという疑問があった。古典読解のための基礎的な知識を身につけるという目標を踏まえた上でも、結局は教材に対する理解の深さがそのまま古典への興味につながることは否めない。だとすれば、生徒にとってもっと身近で興味深い教材こそ、必要とされるものであると思う。教材を生かし、古典への興味を深めるということを考えるとき、改めてこの教科の持つ困難さを思わざるを得ない。

朝の電車で学生服姿の高校生に囲まれていると、文庫本の頁を繰りながらも、つい彼らの会話に気持ちを奪われてしまうことがある。話題となるのは、どこの高校生も大した違いはなく、クラブのこと、試験のこと、友人のこと、テレビのこと、そして退屈な授業のことである。やはり何年たっても、高校生の会話などというものは少しも変わらないなと思う。かつて私たちも、授業さえなければ学校はどんなに楽しい場所だろうと話しながら電車に揺られた。しかし、こうした会話が、最近の私の耳にはかなり痛く響くようになった。

（錦城高等学校講師）